

続 アメリカ医療の光と影 バースコントロール・終末期医療の倫理と患者の権利

李 啓充 著

李啓充氏は『週刊文春』で大リーグに関する素晴らしいコラムを6年間連載されていた。その後、見事な大リーグ本も出されている。で、世間には、氏のことを稀有な大リーグ通としてしか知らない人が多いようだ。それが悪いというわけではないけれど。

だが、医療界で働く私たちは違う。氏が大リーグ通として広く知られるようになる前に書かれた『市場原理に揺れるアメリカの医療』（1998年、医学書院）を忘れることなどできない。その分析の鋭さ、読む者を引きずり込む圧倒的な筆力、随所に散りばめられた粋な大リーグ関連ネタ。氏の鮮烈のデビューだった。この本を読んで氏のファンになった医療人が多いはずだ。その後も、氏はアメリカ医療の光と影を描きつつ日本の医療に厳しい問題提起をするという本を出し続けてきた。そして、本書。

氏の鋭い分析、読む者を引きずり込む圧倒的な筆力は相変わらずだ。このテの本に対しては不謹慎な表現かもしれないが、読み物として実に面白いので一気に読み通せてしまう。もっとわかりやすく言うと、数頁読んだだけで、“やめられないとまらないかつばえびせん”状態になってしまう。

さて、本書の中心テーマははっきりしている。「まえがき」の冒頭に氏自身がはっきりと記されている通りだ。「患者の権利」、それも「自己決定権」。こうし

た重いテーマを論じるには、氏のような分析力と筆力を持ち合わせていないと、おそらく読む者を飽きさせずに最後まで読ませるとするのは無理だろうと思う。

氏はアメリカで延命治療中止のルールが確立されるに至った歴史的経緯を記している。延命治療中止にまつわるルールの根幹をなす原則が「患者の自己決定権」だからだ。また、氏はピルの開発とバースコントロール普及運動の歴史を記されている。「患者の自己決定権」は「プライバシーの権利」に由来するからだ。こうしたことを記すに当たって、氏は徹底して、歴史に登場した具体的な人物たちを実にきめ細かく語っている。まるで伝記の積み重ねのようにだ。で、読むほうは、1人ひとりの人物が歴史で果たした役割がわかると同時に、登場人物たちのあまりに人間的な側面にうなり、涙することになる。笑うこともある。

そういえば、本書には大リーグ関連ネタは登場しない。でも、それに代わるネタがちゃんと用意されているのが嬉しい。

慶應義塾大学准教授・病理学 向井万起男

●四六 頁280 2009年

定価 2,310円（本体 2,200円＋税 5%）

[ISBN978-4-260-00768-9] 医学書院刊